

「ミヌシロ —白糸の祈り—」

プロット

テーマ: 命・記憶・祈りの継承

- ・舞台は山間にある小さな村で、現在は忘れられた古い信仰がある
- ・白布を織る少女が命を織り終えることで村が存在し続ける
- ・ヒロインたちは糸を織り、白い布が完成すると死を迎える“蚕”的宿命を背負う
- ・主人公(現代の大学生)は卒論の取材で村を訪れ、夢や幻視を通して、過去の少女たちと出会う

現代から迷いこんだ主人公が、三人の“生きた証”を受け継ぐ物語

逆順的にヒロインたちの死の受容を後押しし、主人公の生となる
(澄羽→澪→祈織→主人公)の継承

現代で主人公が生きることがヒロインたちの死を決定づけている

澄羽(すう): 生と始まりを象徴する少女

- ・知っている身体と知らない心で白布を織り続ける
- ・主人公と過ごす時間は、少女に生きることの尊さと死の受容を与える
- ・「生きたい」「空を自分の羽で飛んでみたい」
蚕の成虫には翅(はね)があるのに、自分の力で飛ぶことはできない

澪(みお): 記憶と夢を象徴する少女

- ・澄羽の糸を受け継ぎし存在
- ・古びた手帳を手にし、記憶を映す池を静かに見つめている
その池を通して、夢か現か分からないままに主人公と心を通わせる
- ・主人公は夢だと気づかず現実と思っている
澪は現実だと思えず夢だと信じている
- ・彼女は現実で会いたいと願い、主人公は夢でしか会えない
- ・日記＝夢の反射鏡

澪が夢で見たことを日記に書く → 主人公がその断片を読む → 夢が終わる = 澪が生を終える

祈織(いおり): 祈りと終わりを象徴する少女

- ・二人の糸を受け継ぎし存在として、村の真実を語る
- ・最後の織り手であり、主人公と自分たちの継承を理解している
蚕的宿命を始めから受け入れており、澄羽や澪よりも成熟した温度を持っている
- ・「受け継ぐこと」と「祈ること」それは死ではなく、生きた証を織り上げる行為
- ・「村の伝承と輪廻」命の終焉と再生の儀式
- ・全ての想いが祈りとして結ばれ、主人公が継承者となる